

平成 22 年 5 月 21 日現在

研究種目： 基盤研究（C）
 研究期間： 2007～2009
 課題番号： 19520242
 研究課題名（和文） 20世紀チェコの視覚的想像力にかんする総合的研究

研究課題名（英文） On the Visual Imagination of Czech Art in the 20th Century

研究代表者

赤塚 若樹（WAKAGI AKATSUKA）
 首都大学東京・人文科学研究科・准教授
 研究者番号：80404953

研究成果の概要（和文）：本研究のテーマは、20世紀のチェコの視覚芸術において発揮されている想像力のあり方を美術史的・文化史的文脈を考慮するだけでなく、歴史的・社会的・政治的状況も視野に入れながら考察することにあつた。おもに映画、写真、絵画、グラフィック・デザインといったジャンルをあつかい、その特色が、シュルレアリスムを中心とするアヴァンギャルドの美意識ならびに社会主義体制下の歴史的・社会的状況と密接に結びつきながら独自の発展を遂げてきた点にあることをあきらかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study, I have considered the visual imagination of Czech Art in the 20th century not only from the viewpoint of the art and cultural history, but also in light of the social and political context. In dealing especially with such genres as painting, drawing, photography, film, graphic art, I have elucidated that the characteristic qualities generally arise from the fact that it has developed distinctively in close relationship with the modernist avant-garde aesthetics, particularly surrealism and/or the social and historical circumstances under socialism.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：視覚文化論

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学・ロシア東欧文学

キーワード：映像文化，中欧，視覚文化，表象文化論，東欧，映画，美術，文化史

1. 研究開始当初の背景

東ヨーロッパないし中央ヨーロッパと呼ばれる地域が20世紀に生みだした芸術、とりわけ視覚芸術の研究は、21世紀を迎えてからようやく本格化しはじめたといつてよい。

その背景には、20世紀の長い年月のあいだそこに影を落としていた抑圧的な政治状況から、その地域が1989年にはじまるいわゆる東欧革命とともに解放されたこと、そしてまた、これまでにある一定の時間が流れたた

めに文化・芸術をしかるべきかたちで取り上げられるような状況が整いつつあることもあった。

こうした地域文化的諸事情にくわえて、もうひとつ見落としてはならないのは、現代社会における情報文化のあり方に変化が生じている点だ。たとえば従来の情報伝達にあっては文字が第一の手段だったが、いまやその重心は絵や図表へと確実に、そして急速に移行している。その大きなうねりと、年々高まっていく映像文化への関心に密接な結びつきがあることは疑いを容れない。いくつかの大学に新学科を設置させるほどの力をもった昨今のアニメーション・ブームもあきらかにそうした動きのなかにあるだろう。

こうしたことがらを視野に入れたうえで中・東欧の映像文化が注目を集めはじめていることに着目すると、たんなる古い芸術の掘り起こし、未知の芸術の評価という以上の理由があると考えてよかったといえる。

本研究はこのような状況のもとで計画・構想された。

2. 研究の目的

このような状況のもとでスタートした本研究が当初目的としたのは、20世紀のチェコの視覚芸術にあらわれたその想像力のあり方を美術史的・文化史的な文脈を考慮するだけでなく、歴史的・社会的・政治的状況も視野に入れながら総合的に分析・検討し、その特色や独自性、ならびに現代アートに占める独特な位置を解明することだった。

ひとことで視覚芸術といっても多岐にわたるが、今回はとくに(1)映画、(2)写真、(3)絵画、そして(4)グラフィック・デザインという4つの領域を集中的にあつかっていくこととした。

こういったチェコの視覚芸術はとくに20世紀のアヴァンギャルドの時期にめざましい発展を遂げ、それ以後独自の展開をみせている。そこで発揮されている想像力のあり方を検証すること、それが本研究の最大のテーマだったといえる。

3. 研究の方法

まず第一に20世紀チェコの視覚芸術にかんする資料を収集することに力を注ぎ、あわせてその分析・検証を行なうための環境を整えていくこととした。このようなかたちで研究基盤を確立させながら、取り組むべき個々の領域ではさしあたり以下のように研究を進めていった。

(1) 映画について。おもに60年代の〈ヌーヴェル・ヴァーグ〉とアニメーションをあつかう。ジャンルとしては異なるものの、両者のあいだには社会主義体制のもと映画産業が国有化されたがゆえにきわめて高い質を

維持することができたという共通点がある。DVDやVHSといった映像資料を集中的に収集しながら、歴史的・社会的背景を検証し、チェコ映画に特徴的な映像表現とはどのようなものかをあきらかにすることを目指す。

(2) 写真について。とくに1920年代に入ってから始まる「新しい写真」とその系譜に連なる写真家たちの動向に注目する。当時著しい発展をみせていた機械文明に呼応するようにして生まれてきた「新しい写真」。その「新しさ」とは何か、そこにチェコ特有の何かがあるのか。このような観点から「新しい写真」にはじまる写真芸術の流れを検証していく。

(3) 絵画について。チェコの現代アートの中心にあったのはやはりシュルレアリスムだったといえる。この運動は本国フランスではやがて衰退するが、チェコでは全体主義の抑圧のもとでも地下で命脈を保ち、現在にいたるまで連綿とつづいている。チェコではなぜこうもシュルレアリスムが根付き、多くの芸術家の関心を引きつづけてきたのだろうか、その独自性とはどのようなものなのだろうか。チェコの視覚芸術全般にあてた影響も視野に入れながらこうした問題について考えていく。

(4) グラフィック・デザインについて。とくにポスター芸術に光をあてる。19世紀の中産階級勃興の時期にフランスで発明されたポスターはすぐにチェコでも導入された。ポスターは本質的に広告メディアであるがゆえに歴史的・社会的状況をほかの芸術形式よりもはるかに明瞭に映し出しているといえる。このポスター芸術をとおしてチェコの視覚文化のあり方について多角的に考察をくわえていく。

さらにもうひとつフォトモンタージュをふくめた意味でのコラージュ・アートにも注目しておく。視覚芸術のほかのさまざまなジャンル(たとえばブックデザイン)や動き(シュルレアリスム)と深くかかわりながら発展したチェコのコラージュ・アート、その特性について検討していく。

個々の領域で以上のように研究を進めるその一方で視点を横断的なものにし、諸ジャンルの相互関係ならびにそこに通底する視覚的想像力のあり方の検討に向かった。そのさい美術史的・文化史的な文脈のみならず、歴史的・社会的・政治的文脈なども考慮し、幅広い視野のもとでチェコの視覚芸術を生みだす想像力がどのようなものなのかを「総合的に」検証しようとした。

4. 研究成果

20世紀チェコの視覚芸術を研究するための環境整備に取り組むことができたのは、これまでほとんど手つかずの領域が多かった

だけにきわめて意義があったといえる。とりわけ写真集や画集といった美術書と映画にかんする映像資料を充実させることができた点は今後の研究にとって大きな意味をもつにちがいない。

こうした研究基盤を利用して、20世紀の視覚芸術を生みだす想像力について考察を進めた結果、その特色が、シュルレアリスムを中心とするアヴァンギャルドの美意識ならびに社会主義体制下の歴史的・社会的状況と密接に結びつきながら独自の発展を遂げてきた点にあることをあきらかにすることができた。これをひとまずの結論として提示しておくが、そこにいたるまでにさまざまなことがらを検討の対象としてきたことはいうまでもない。

たとえば世界的に評価の高い現代の映像作家ヤン・シュヴァンクマイエルの芸術をクンスト＝ヴンダーカマーや博物誌の世界観といった文化史的な背景も視野に入れながら検討し、その本質ともいべきものがシュルレアリスム芸術に特徴的な夢の世界の実現ないし具体化にあることをあきらかにした。このように個別の芸術家をあつかうほかに、20世紀のチェコのアートシーンの動きを記述する試みも行なっており、そうした研究成果をまとめたものとして著書『シュヴァンクマイエルとチェコ・アート』を刊行した。

3部構成のこの本の第1部ではシュヴァンクマイエルを多角的に論じており、前述の主題のほかに、この作家に特有の触覚を重視する創作の方法、歴史的現実題材をもとめた映画『ボヘミアにおけるスターリン主義の終焉』の映像構成術、そして人間の解放というユートピア的理念に芸術の本質をみる作家としての姿勢などをあつかっている。

第2部ではチェコの映画全般をあつかい、その歴史のほか、「チェコスロヴァキアのヌーヴェル・ヴァーグ」と呼ばれる60年代の映画の興隆、ヌーヴェル・ヴァーグを代表するイジー・メンツル監督の『厳重に監視された列車』とボフミル・フラバルによるその原作小説に見て取れるアンチ・ヒーロー像、世界的に有名なチェコのアニメーションをつくりだした代表的な作家たちの交流、そのひとりカレル・ゼマンのアニメーション作品に登場するキャラクターの特徴などをあつかっている。

第3部ではチェコの芸術をさまざまな観点から検討しており、そこにはチェコのマネリスムの伝統、作曲家レオシュ・ヤナーチェクの発話旋律、チェコ・シュルレアリスムの歴史などのテーマがふくまれている。なお、チェコの芸術を総合的に取り上げた書籍としてはこれが日本で最初ものだと思われる。

研究成果については、活字媒体を利用し、このような書籍あるいは論文といったかた

ちで発表するほか、都内のミニシアターで研究代表者が行なっている、世界のアニメーション文化についての連続講演のなかでも、チェコをはじめとする中・東欧の映像作品も取り上げてきた。これをとおしてこの地域の政治的状況に深く結びつくプロパガンダという形式についてもこれまで以上に注意を向けることとなり、そのプロパガンダという観点からチェコの映画、とりわけアニメーション映画を集中的に検討する機会ももった。そのさいアメリカ、ソ連、フランス、ドイツ、そして日本といった諸外国の作品との比較検討も行ない、その成果はソ連のプロパガンダ・アニメーションのロードショー公開にあわせて作成されたパンフレットに寄せた文章などにも反映されている。

活字媒体に発表した研究成果については、ほかに以下のようなものがある。ヤナーチェク作曲のオペラ『マクロプロス家の事』が上演されるさい、ヨゼフ・チャベックがデザインした最初期の舞台美術ならびにこの作曲家とチャベック兄弟の関係について考察し、その成果を同オペラのプログラムにエッセイというかたちで発表した。メンツル監督の映画『英国王 給仕人に乾杯！』が公開されるさい、チェコ映画の魅力と特徴をチェコの一般大衆と批評家それぞれの評価という点から検討し、その成果を上映会のパンフレットに寄せた文章に活かしている。また「白」という色をめぐる横断的な視点から映像作品を検討する論考のなかでも1960年代のチェコ映画を取り上げた。

チェコを代表する小説家ミラン・クンデラがチェコ・シュルレアリスムと結び結んだ関係を検証し、この作家が創作活動の出発点ではシュルレアリストであったこともあきらかにした。この研究成果についてはアメリカで英語の論文として発表した。

チェコには直接かかわらないが、中・東欧の映像文化ということでは、イギリスで活躍するアニメーション作家ブラザーズ・クエイが美的な側面で「ポーランド派」と呼ばれるポスター作家たちから多大な影響を受けており、アニメーション制作のきっかけまでもそこにあつたという事実をしめした。『シュヴァンクマイエルとチェコ・アート』のなかでチェコの現代アートの歴史をたどるさい、視覚芸術の領域ではないものの、1989年のビロード革命につながる民主化・自由化の動きのなかで重要な役割を果たしたロック・バンド、プラスチック・ピープル・オヴ・ザ・ユニヴァースを視野に入れたことにも言及しておきたい。

最後に、チェコ芸術のさまざまなジャンルを横断的に見渡しながら、視覚芸術作品と文学の関係についても検討し、両者に密接なつながりがあることを確認した。なかでもアニ

メーションと 60 年代の〈ヌーヴェル・ヴァーグ〉をめぐっては文学者とのきわめて興味深いかわりがみいだされるが、限られた時間のなかでは、作品分析にしても背景の調査にしてもかならずしも十分に行なえたとはいえず、これについては今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

- ① 赤塚若樹, 「ブラザーズ・クエイとポーランドのポスター芸術」. 『REAR』第 23 号. 2010 年. pp. 25-28.
- ② 赤塚若樹, 「プロパガンダ・アニメーションに注目！」 「ロシア革命アニメーション 1924-1979——ロシア・アヴァンギャルドからプロパガンダへ」試写会資料, 2009 年 2 月. pp. 7-8. (6 月にロードショー公開のさい、パンフレットに再録。ページ記載なし。)
- ③ 赤塚若樹, 「つくられた白を生きる映像たち——写真、映画、アニメーション」. 『國文學』第 54 卷第 3 号 (2009 年 2 月臨時増刊号). 2009 年. pp. 124-136.
- ④ Wakagi Akatsuka, "Milan Kundera and Czech Surrealism". Craig Cravens, Masako U. Fidler, and Susan C. Kresin, eds. *Between Texts, Languages, and Cultures: A Festschrift for Michael Henry Heim*. Bloomington, Indiana: Slavica Publishers, 2008. pp. 199-207.
- ⑤ 赤塚若樹, 「チェコ映画の魅力——ふつうの人びととその生活」. 映画『英国王 給仕人に乾杯!』パンフレット. 2008 年 12 月. pp. 18-19.
- ⑥ 赤塚若樹, 「チャペックとヤナーチェク——『マクロプロス家の事』をめぐって」. NISSEI OPERA 2008/東京二期会オペラ劇場, オペラ『マクロプロス家の事』プログラム. 2008 年 11 月. pp. 30-33.
- ⑦ 赤塚若樹, 「20 世紀チェコのアート・シーン——ヤン・パトチカを出発点として」. 『思想』2007 年第 12 号 (通巻 1004 号). 2007 年 12 月. pp. 169-188.
- ⑧ 赤塚若樹, 「実現された夢の世界——シュヴァンクマイエル・アートの正しい見方・楽しみ方」. サントリー文化財団研究助成『「ヨーロッパにおけるアニメーション文化の独自の発展形態についての調査と研究」(アニメーション文化研究プロジェクト 2005-2007) 研究成果報告論集』. 2007 年 7 月. pp. 34-50.

[学会発表] (計 30 件)

- ① 赤塚若樹, 「夜のポエティズム——赤塚若樹のアニメーション講座」. 第 39 回 (連続講

演) アップリンク・ファクトリー. 東京・渋谷. 2010. 3. 13.

- ② 赤塚若樹, 「七月の夜——ブルーノ・シュルツ祭」の「討議」に参加. 東京大学・本郷キャンパス. 2009. 7. 20.

- ③ 赤塚若樹, 「夜のポエティズム——赤塚若樹のアニメーション講座」. 第 11 回 (連続講演) アップリンク・ファクトリー. 東京・渋谷. 2007. 4. 14.

[図書] (計 1 件)

- ① 赤塚若樹, 未知谷, 『シュヴァンクマイエルとチェコ・アート』, 2008 年, 301pp.

[その他]

ホームページ URL

<http://www.asahi-net.or.jp/~tt2w-aktk/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤塚 若樹 (WAKAGI AKATSUKA)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号: 80404953

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし